

医療・健康

向き合う



一般社団法人 VHO—net 理事 増田 一世さん ②

年に1回、2日間のワークショップがVHO—netの活動の大きな柱だ。ヘルスケア関連団体が社会の中で価値ある存在として認められるためのリーダーの力量形成の場だ。主体的な関わり、互いの経験を尊重し、他者の発言を否定しない——を大事にしている。当たり前だが実際には難しい。話し合いを重視するワークショップで時にルールを逸脱する人がいる。その時にどう対処するのかが問われる。見て見ぬふり、気づかぬふりではすまされ

ない。そのことが問題解決を長びかせ、こじらせる。

ワークショップは日常の活動の中で起こりうるコミュニケーションギャップを経験する生きた学びの場だ。製薬大手、ファイザーの協力で人材養成のノウハウの提供も受けた。社員が講師を務め、ファシリテートやコミュニケーションについての実践的なレクチャーを行う。その学びと実践がそれぞれの団体運営に生かされる。

ワークショップは準備委員会が1年かけて企画・運営する。新たな情報・知識を吸収する場としての役割もある。2019年に開催した第19回のテーマは「資金調達」。どの団体にとっても切実な課題だ。

VHO—net 理事、照喜名通は自身もクロイン病患者。沖縄県難病相談支援センター「アンビシャス」の副理事長を務める。難病患者の在宅就労を目的にクラウドファンディングで寄

患者リーダー同士で学びあい

付金を募り、約2カ月で152人から112万円を得た経験をワークショップで発表。「難病のある人の就労の厳しい状況を広く知らせることができた。お金を代えられない大きな副産物を得た」と訴えた。

同理事でファイザー社員の喜島智香子は寄付する企業の立場で、どう支援先を判断しているのかを明かした。「団体のビジョン・ミッションを役員会で明確にし、役員が合意の上で寄付活動することが大事。共感を得るためには人々が感動するストーリーや各団体の透明性も問われる」と語った。

ヘルスケア関連団体と企業側の経験や意見を同時に学べるVHO—netの特徴を生かした企画だった。ワークショップでの学びを小冊子「資金調達」にまとめた。ワークショップで得た気づきや知見を広く社会に発信していくことも私たちの大事な取り組みだ。